

## スリランカ調査報告

清水 由紀<sup>1</sup>

### 1. 調査の概要

調査者：馬場繁子 (NGO「スランガニ基金」代表)、村松英美 (JICAスリランカ事務所)

報告：清水由紀 (子ども発達教育研究センター研究協力員)

当初は、2003年11月にスリランカの視察を行う予定であったが、出発直前にスリランカで起こった政変により安全性の確保が困難となったため、視察は中止した。代わりに、NGO「スランガニ基金」の馬場繁子氏、JICAスリランカ事務所の村松英美氏の協力により、スリランカの幼児教育についての政府の教育指針などのさまざまな資料や情報を入手することができた。さらに、教員養成センター、教員養成センター附属サクラ幼稚園、スランガニ基金関連幼稚園におけるアンケート調査を実施することができた。以下に、それらの調査によって明らかにされた、スリランカにおける幼児教育の現状をまとめた。

### 2. スリランカの概要

気候は地域によって異なり、高地は気温の変化が激しく、朝晩防寒具が必要である。道の状況については、メインルートは海外の援助で整備がされて状態がよいが、はずれるとかなり悪く、時間もかかる。車でもあまり良いわけではない。

スリランカの民族は、シンハラ人が国の74%を占めている。このため、政府はシンハラ語を国語にしようとした。タミール人は18%を占め、スリランカタミール、インドタミールの2種類が存在する。インドタミールは、イギリスの植民地時代にコーヒー、紅茶の栽培で連れてこられた人々であり、タミール語を使用している。ムーア人は7%を占め、その他の民族が1%存在している。宗教は仏教が70%を占め、次いでヒンドゥー教が15%、キリスト教が8%、イスラム教が7%となっている。

国内情勢については、内戦は2002年の2月から停戦状態にあるが、LTTE (タミール人過激派「タミール・

イーラム解放の虎) がまだ交渉の席に来たことがない。戦闘事態はなく、再度の戦争突入はよほどのことがないと起こらないだろう、というのが国民の意識ではないかと考えられる。北東部は独立国家としての認定を目的とし、LTTEの支配下に置かれている。キャンプの難民もまだおり、キャンプ内で幼児教育が行なわれている。パティッカロアにはトラウマのある子どもが多い。子どもたちの精神的なケアセンターをしている外国の支援団体もあるが、さらなる支援が必要である。

教育面復興も遅れているが、ドイツの援助が初等教育で動いている。学校は、民族により分かれている。幼稚園では、タミール語の歌をシンハラの子供園で教えていたりもする。

### 3. 幼児教育の背景

ユニセフの資料によると識字率は高いが、地方やスラム地区には学校に行っていない子どもも見られる。生活レベルとしては中流レベルが多く、インドの中流カースト程度がほとんどである。地方にいくと、カーストの差がシンハラの中でも見られる。

親日家の人が多い。日本は広島の後で発展を遂げた国という認識があるためだと考えられる。日本は黄金の国であるという印象を持っているということである。日本の1ヶ月の給料がスリランカの1年間の給料にあたる。

子どもの数は、教育にお金がかかるために、都心では1つの家庭に2人くらいが平均的である。家族計画が受け入れられている。地方では2人～5人くらいが平均的である。平均寿命は約72歳である。

社会民主主義の国であり、そのために発展が遅れているという声もある。医療は充実しており、無料で受けることができる。保健婦が村に1人は必ずいて、栄養調査・乳幼児検診や体重測定を行う。無料の国立病院は並ばなければならないので、お金のある人は私立病院に行く。

親は小さい時から教えておけば大きくなって成功するという考えを持っており、将来につながる第一歩

1 お茶の水女子大学人間文化研究所・子ども発達教育研究センター

として幼稚園に期待をしている。イギリス植民地の影響からか、学校に行かせるという親の意識が非常に高く、インドやネパールに比べ、親が熱心である。文字＝教育という意識が根強く、字を教えると成功するという考えがある。アカデミックな文字教育を行なわないと、その幼稚園では何もやっていないとみなされる。歌や踊りではアカデミックではない、ということになる。

シンハラ人は世界的にみて少数民族なため、英語が必要であると考えており、英語熱が強い。そのために外国の、特にイギリスのロンドンイグザムをめざしている。ロンドンの歴史を勉強してスリランカの歴史を勉強しなかったりする。英語がわかれば外に出ていける、教育＝英語という考えがある。英語を教えたり文字を教えたりしない幼稚園は人気がなく、園児も減り、死活問題になる。

しかし、長期的な視点をみると、遊びの中の学びの方が成功する、ということが少しずつ理解されてきたようである。研修会でも幼稚園を経営、ビジネスで考えてみるというような発想の転換を図っている。

## 4. 幼児教育の実態

### ①政府による援助や基準

政府からの資金援助は、現在はなく、教材購入も難しい状態である。幼稚園設置基準は、特に定められておらず、様々なところが適当に建てている。寺併設や、農業組合が立てた建物などもあり、コミュニティセンターとして使っている幼稚園が6～7割もある。単独の幼稚園は少ない。将来理想に近づきたい設置基準はあり、ゆくゆくはそれを満たしていない園は廃止、という形になる。しかし基準が高いため、8割以上はクリアできないと考えられる。

婦人問題雇用省が3歳から5歳までのシラバスを作成し、これにはリサーチペーパーもついている。その後、ユニセフ・セイブザチルドレン・チャイルドビューローが合同でカリキュラムを作成したが、外国の方がつくったので、スリランカの文化にあわないものがある。環境庁が出している子どもが取り組める環境教育（ゴミを捨てない、木を大切に等）のハンドブックもある。

義務教育は小学校から無料であり、制服・教科書も支給される。しかし、貧しい家庭では、最初に準備しなければならない文具品、靴などにかかる約1000ルピーが用意できないため、ドロップアウトす

るケースもある。

### ②教員

最終学歴は中学3年程度が平均的ではあるが、高卒もいる。幼稚園教員の給料は一ヶ月500ルピーから1000ルピーであり、小学校の教員の給料（月6000ルピー）と比べるとかなり低い。地位も小学校の先生より低い。教員の年齢は若く、結婚するとやめることが多い。結婚すると家にいなければならないためである。

園長はおらず、1人の先生が運営している寺子屋のような形式である。相互扶助の意識が高く、ちょっと子ども預かってほしい、というところからスタートするという形が多い。男性教員は稀で、女性教員の方が圧倒的に多い。500ルピーという給料をみると、生活は苦しい。小学校の教員には退職金・有給休暇・クリスマスボーナスなどができるが、幼稚園の教員にはない。

### ③月謝

幼稚園に払う月謝は1人につき1ヶ月、25ルピーから100ルピーである。スリランカのお祝いに1週間2週間幼稚園を休むと、休みが多いからといって親が月謝を払わない。

### ④制服

全員が制服を着用している。制服のサンプルをみせて、母親が作るということである。イギリス時代の植民地の影響から、制服を着ていることにはアカデミックな場への参加という意味があるとの考えがあるようである。また制服のあるほうが貧富の差がみえない。スリランカの人には着道楽のため、週に一回は好きな服を着ても良い「パータパータ（「色々」の意味）」の日を作る。お遊戯会や、発表会の時、お母さんの熱意は高く、借金してでも生地を買って衣装を作るということである。

## 5. NGO「スランガニ」基金（代表：馬場繁子氏）による活動

青年海外協力隊隊員の経験を持つ馬場繁子氏により、時にJICAとの連携を図りながら、次のような活動が行われている。

### ①幼稚園教員の研修

すでに幼稚園の先生として活動している方のフォ

ローアップを目的とし、2日間の研修を実施している。先生たちは熱意があるが、保育の実践的な技術（ちょっとしたハンドワーク、ゲームのやり方）を教えてあげれば、もっと保育が実りあるものになると考えた。歌・ゲーム・英語・応急処置の方法・栄養指導(地区のドクターを呼んで講義をしてもらう)が研修内容として行われている。

### ②スモールグループと積立貯金

地区で幼稚園が5～10園集まり、スモールグループを作り、保育の情報交換とシェアを行う。積み立て貯金が今年から始まり、10ルピーずつ集め貯金している。キープしたお金をない人に貸して、利子をつけて戻す。利子がたまって、それを基金にして活動していく予定である。

### ③情報誌

保育情報誌を2ヶ月に一回発行し、先生たちに無料配布している。内容は、絵本箱事業の情報、折り紙、子どもに合った環境やおもちゃについての説明、英語やタミル語の会話、タオルでつくる人形などが含まれている。幼稚園経営の方法も含まれており、子どもの出席の扱い方として、休んだ理由をきくこと、長期欠席の場合に理由をきくことも含まれている。

### ④絵本箱事業

移動式の木製の箱にスリランカの絵本25冊が入っている。貸し出しバックと感想ノートをつけて週末も家庭への貸し出しを行っている。幼稚園で1ヶ月使った後、次の地区内の幼稚園と絵本を交換する。巡回して、本を貸し出ししている。読書は楽しみであることを知らせる目的がある。絵本を通して、楽しい世界を知ったり異文化を知るきっかけになると考えている。この事業をもとにスリランカの絵本の質を上げたいと考えている。

### ⑤活動の成果

絵本の誤字があったなどの指摘もあり、親の意識も高くなった。子どもがお父さんに読んでもらいたいと言っていた、などの報告から、絵本により家族のつながりができたという声も聞かれる。地区内の幼稚園同士の連携も強くなったようである。

## 6. JICAによる活動

JICA・青年海外協力隊の活動は、最も長い支援の歴史(20年)と十分な実績がある。協力隊員と現地行政との協力、連携の努力により、教員養成センター(トレーニングセンター)、教員養成センター附属サクラ幼稚園(モデル幼稚園)を設立し、同所の幼稚園指導者4名、教員5名が日本で研修を受けたという実績がある。協力隊員9名、11年間継続派遣の実績もある。現在はJICAから現地へ完全に引き渡し、その後も現地での活動が引き継がれている。青年海外協力隊の活動の一つのモデルケースであると言える。

## 7. まとめ

スリランカは長い内戦を経て現在幼児教育の成長過程にあることが明らかになった。教師の育成、養成について、現地の人々が必要性を十分感じている段階に来ており、家庭、親たちの幼稚園ニーズも高まっている。

支援の現状としては、JICAとNGO、現地の人々との連携がよいことが、大きな特徴であろう。そのような連携が可能となっているのは、上記のように保育者や親のレベルでの意識の高揚が背景にあるからであろう。

しかし、政府レベルでは、それに応えるための法整備が追いついていないのが現状である。現在スリランカ政府による幼稚園の設置基準等はない。しかし、教育法規の必要性を感じてはおり、今後UNICEFなどの協力を得ながら、法の面からも整備されていく過程にあると言える。

### \*関連資料

・資料2-5 スリランカアンケート調査結果(教員養成校、サクラ幼稚園、Ampara地区幼稚園)